歴史資料館だより

発行者　聖隷歴史資料館
〒四三三－八五五八
浜松市三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL　〇五三（四三九）三四〇七
FAX　〇五三（四三九）三三四七

「見えるものは見えないものから」
～遠州栄光教会の立脚点と使命～

遠州栄光教会　牧師　森田　恭一郎

今回聖隷歴史資料館の企画のお陰で遠州栄光教会特別展の機会を与えられました。標語は「見えるものは見えないものから」。丁度、見える樹が見えない根っこの部分で支えられているように、見える建物が見えない土台に支えられているように、教会も同じ。聖隷も同じです。

教会の礼拝や働きは、見えない神さまの恵みとそれをもたらす見えない聖霊の導きが見える形になったものです。聖隷の隣人愛の見える実践も、神の愛を受けとめる見えない信仰と祈りが応答実践として形になり受け継がれてきたものです。見えないものに目を注ぐ視点あってこそ、私たちは自分自身の存在や働きの意義を明らかに出来ます。展示が、まず目指したことはここにあります。

その上でこの展示において確認したと思うことは以下の通りです。

①当教会が日本基督教団の信仰告白を告白する教会であるということ。またカルヴァンの綱要の学びなどを通して神学を大切にし、福音に立って「神の栄光のために」の姿勢を確認してきた教会であるということ。当教会の立脚点はここにあります。

②当教会の本史を一九八四年の法的な設立時点からではなく一九二三年四月の日本基督教会濱松伝道所開設時からとしたこと。

③現在二つの礼拝集団を擁している当教会が「二つで一つ」ではなく「一つで二つ」の教会形成を目指しているということ。

④当教会は聖隷の働きを生み出してきた信仰を受け継ぎ、聖隷の働きを執り成し仕えていくことが当教会の伝道の使命であるということです。

講演題は「神の歴史の育みの中に」としました。「創設の精神が自覚されたのは、我々が貧しい結核患者の世話を始めて一年ほどたったときであった」と長谷川保の言葉が残っています。歴史の営みの中では、私たちは自分の思いを越えて神さまに用いられて、その歴史の育みの中で、後からその精神や意味が自覚されてくることがあるわけです。

当教会にとってこの特別展は、昨年五月三〇日の「教会と聖隷」集会から続く一連の営みとなりました。「長谷川保と日本国憲法の国家目標～人民の福祉が最高の法」の講演の中で大木英夫氏は、松本美實牧師の言葉を引用して「遠州教会はその出発の始めから今日に至るまで、福音にかたく立ちつつ、ささやかながら『教会と社会』の問題に真剣にとっくんできた教会だと私（松本牧師）は思っている」と遠州教会の特質を指摘された。また「長谷川は、西村牧師と共に、遠州栄光教会の設立へと行く。それはカルヴィニズムにおける教会と社会の結合の保持への決断であった。戦後日本基督教団における教会的社会的実践への選択があったのだと思う」と当教会の設立意義を指摘された。氏のこれらの指摘は、

既に過去の歴史を知らない世代の私たちに、当教会につながる意味を改めて教示するものとなりました。

また発題の中で、聖隷のシンボルマークの十字架は漠然とキリスト教を表しているのではなく教会を表している、との堀口さんの指摘も衝撃的でした。何故なら、当教会の「基本精神（姿勢）」が文章化されているにも関わらずうっかりすると、巨大化した聖隷グループの働きはもう教会の手を離れている、と本気で執り成し奉仕することをあきらめかねないかもしれなかったからです。そのような中で堺常雄院長と山本敏博理事長が聖隷と教会の関わりを私たちにはっきりと促して下さったことは、本当に感謝すべきことです。そして大切に受けとめるべき課題です。

この展示自体が一連の営みの中で育まれてきました。また展示内容についてのご意見を寄せて下さったり写真の提供など多くの方々のお支えの中でここまで来ました。感謝です。

最後に、この特別展示のねらいについて一言します。私たちの展示は歴史展示として史実の確認の作業でありつつ、しかしそれは、史実確認に主要な関心があるのではなく、まただ過去を懐かしんだり誇ったりするためでもありません。むしろ過去の営みから当教会が今後何を大切にして歩んで行くべきかの意味を見い出そうとする歴史解釈の作業であるということです。もちろん解釈は様々あり得るわけですから、ご覧頂いて、ご意見を賜りたいと願います。

「キリストを愛し、喜びに満ちあふれて」

遠州栄光教会　牧師　平野　芳子

「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」　（ペトロ一　一・八―九）

私たちの見える世界は、見えない神の言葉によって成り立っています。

ペトロは教会について、「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え」て、「朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者」としてくださっている。だから「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています」と語っています。

そして、「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、…イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです（一・三―七）」とも記しています。

確かにパウロが語るように、教会は「希望」と「愛」と「苦難」が重なり合っていますが、見えないイエスを愛し信じることにより「信仰の実りとして魂の救いを受け」、すべてに優る喜びに満ちあふれています。私たちの遠州栄光教会は、まさにその証人として立てられていると言っても過言ではないでしょう。

遠州栄光教会は、一九二三年に「日本基督教会濱松伝道所」として開設されました。その伝道所の設立の年に、長谷川保や大野篁二らが受洗しました。その若者たちは勇気と希望に満たされ、聖なる奴隷となられて弟子の足を洗われたイエスに倣う者となるために「聖隷」を立ち上げ、力強く歩み始めたのです。聖隷はやがて結核を病む人々を受け入れたことから、迫害され、多くの苦難を背負いました。しかしその歩みの中で、朝毎にまず礼拝がささげられたのです。

その礼拝は、「誰一人欠ける事がなくこの朝（あした）を迎え、…」という言葉で始まり、聖書が読まれ、説教がなされ、祈り、讃美歌が歌われました。礼拝は夕べにも、手術の前にもささげられました。

そうした礼拝を通して、看とる人も看とられる人も、見えない主イエスと出会い、その主がいつも共にいてくださり、困難を共に担い、深い慈しみと憐みを与え、主の平安と恵みで満たし、限りない希望と祝福とを与えてくださることを確信していったのです。

ある牧師は東京の神学校で学んでいた一九三七年に、浜松から来た女性たちが「愛と奉仕は必ず勝利する」と何度も力強く語るのを聞いてとても驚いた。それが聖隷の事だと分り実際に見に来たところ、雑木林の中で人々はほとんど裸、履物もなく裸足であるにもかかわらず「愛と奉仕は必ず勝利する」と言いながら実に喜んで奉仕をしていて、またまた本当に驚いたと話しました。

また、聖隷で働いてきた教会員たちも「どんなに忙しく疲れていても、誰かが教会へ行こうと言うのを聞くと、本当に嬉しくなって急いで教会に集まった」と証言しています。

主によって豊かに聖霊を与えられた教会は、その主を力強く「証」し、そして隣人に「奉仕」し、神と人との「交わり」の中で豊かに、喜びにあふれて生きることができますが、聖隷に集った人々こそ主によって生き生きとした命を注がれて、ますます主イエスを愛し、信仰を深め、喜びと希望に満たされて隣人に仕えていくことができたのです。まさに「主を愛し、隣人を自分のように愛しなさい」という主のみ言葉は、この地において育まれ、豊かな実を結んできたのです。

創立から八二年。今回の「遠州栄光教会特別展」は、そうした教会と聖隷の歩みの中で、困難の中でこそ主は生きて働かれ、私たちを大いなるみ救いの中に入れてくださり、喜びを満ちあふれさせてくださることを確認すると同時に、聖隷グループの中心にある十字架を担う教会として福音を宣べ伝え続ける教会であることを確認する、とても良い機会となりました。

どうかこの展示を通して、更に私たちが見たことがないのに主イエス・キリストを愛し、今見なくても信じて、ますます言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれますようにと祈ります。

これからの遠州栄光教会の歩みのために

遠州栄光教会 牧師　野村　稔

今、遠州栄光教会は転機を迎えています。二〇〇四年四月より牧師の体制が新しくなり、あわせて三方原礼拝堂の改築計画が動き出し、そしてこの度、聖隷歴史資料館遠州栄光教会特別展が開かれます。遠州栄光教会の歩んできた歴史を振り返り、神さまから与えられた使命を再確認すると共に、これからのヴィジョンを示す時がきています。

現在の三方原礼拝堂が建てられた頃、三方原の聖隷のエリアで生活をしていた教会員たちは日曜日の礼拝の場所を求めて礼拝堂を建てました。教会員たちは日曜日だけではなく日々の生活の中で、働き人や患者として相互の信仰を深め合い、福音に生きる喜びを確かめ合うことができました。けれども教会員の皆が三方原の聖隷のエリアに住んでいるわけではなく、聖隷グループの仕事をしているのでもない今、遠州栄光教会のこれからのヴィジョンを考える必要が出てきました。

現在、三方原の聖隷のエリアには、患者、利用者、職員、学生など数千人の人が毎日通っています。その中の少なくない人々が、救いを求めていることでしょう。このような人々が、神の御許で安らぎ、力と希望を受けて、一週間の働きに出ることができるように、務めを果たし、聖隷グループと地域の両方に神の福音を宣べ伝えたいと思います。

遠州栄光教会には住吉と三方原の二つの礼拝堂がありますが、二つの礼拝堂がそれぞれ独立するのではなく、二つの礼拝の群れ（礼拝集団）でありながら一つの教会である事に私たちは意味を見出しています。それぞれの礼拝堂の周囲にある聖隷グループの施設や病院、学園の働きと集う人々のために祈ると共に、伝道する使命が遠州栄光教会に与えられていると自覚してのことです。

また聖隷グループのシンボルマークの中心に十字架があるように、聖隷グループの働きと職員一人一人の働く力の中心に、キリストの救いがあり、遠州栄光教会がキリストの救いを伝える責任を負っていると自覚しています。

これまで遠州栄光教会は、福音主義信仰に根ざしつつ、社会事業を生み出してきました。

日本のプロテスタント教会の指導者であった植村正久は「福音の伝道者と社会の木鐸との統一」を志しましたが、植村から洗礼を受けた長谷川保以来、当教会は教会の社会との関わりのあり方、ひいては文化形成のあり方について、祈りと実践の中で尋ね求めてきました。そして、現代の諸教会に対して、発信し得るものを培ってきたと言えるでしょう。社会に身を置いて実践をしながら福音主義信仰に根ざした、時代を超え、かつ時代に対応した教会の姿をこれからも求め続けたいと願います。

遠州栄光教会がこれからも受け継ぎ伝えていくべきものは、福音に根ざしつつ神と人とに仕える信仰です。遠州栄光教会の歩んできた道を振り返り、これからを展望するにあたり、聖隷グループの各法人を生み出してきた先達たちの信仰を受け継ぎ伝えていくと共に、神の栄光のためにますます前進して参りたいと願っています。

◆刊行物のご案内

鈴木唯男、八田亨二、西村一之、古橋　秀、野村志保子　他著
聖隷学園キリスト教センター発行

「鷲のごとく翼をはりてのぼらん」

「鷲のごとく翼をはりてのぼらん」は二〇〇二年四月に公刊されました。

聖隷の結核療養所で長年にわたり苦労や喜びを共にした患者と看護者がメインのメンバーとなり、それに聖隷の教育、医療、福祉の関係者や牧師らが加わって一九九二年七月に第一回の集いが開催されました。以来、一九九六年一〇月までに三九回にわたる集いが持たれ、「聖隷の療養と看護」に焦点があてられました。

当時の聖隷の看護の実際、その根底にある考え方、人間観、死生観が語られており、病むとはどういうことなのか、生きるとはどういうことなのかを深く考えさせられます。聖隷の看護は、結核であれ何であれ、病と闘う「人間」の看護であって、それに敬虔な信仰生活と生命に対する真摯な態度が溶け合って、科学的な看護の方針が編み出され、キリスト教信仰を基礎とする療養生活が作り出されていった様子がみごとに描き出されています。看取るものと看取られる者の心を見つめ、先人の歩んだ足跡を辿りながら、時空を越えて、その基底に潜む普遍の真理に触れることのできる貴重な一冊です。

長谷川保と聖書 3

長谷川 保と「小国主義」

聖隷学園 宗教主任
佐柳　文男

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。」（イザヤ書二章四節）

長谷川保は一九六〇年に欧米各地に調査旅行をした。各国の医療看護の事情を調査し、日本の立法、行政に資するためであった。北欧諸国では医療看護のことに加えて、国中に漲る民主主義と平和に感銘を受けた。

「デンマークの王様の住居が、特別の城ではなく、普通の少し大きい邸宅で僅かの衛兵が居るに過ぎないのに感心し、王様が、気軽に一人で公園に散歩に来る話を聞いて、その民主主義と平和に感心し、内村鑑三や石橋湛山の説いた三等国論を思い出し、ほんとうの理想の国家は大国ではなく、いわゆる三等国の小国でなければ出来ないと痛感した」という。

そして全世界の国々が軍備を廃止し、それに費やす資金を「未開発国の教育、医療衛生、開発、生活改善に用うれば、全世界がどんなにか平和で繁栄の楽土になるであろうかと…秘々と思った」という（『神よ、私の杯は溢れます』、一五〇頁以下）。

長谷川保は内村鑑三や石橋湛山と共に「小国主義」を理想としていた。石橋湛山は日本が「大日本帝国」を僭称していた頃、「小日本主義」を掲げて論陣を張っていた。日本に必要なのはこの「小国主義」である。

日本は明治の初期から、大国意識を持つようになった。日清戦争、日露戦争を通して、日本人の大国意識は際限なく膨張していった。西欧の列強の真似をして植民地経営にも手を染めた。十五年戦争突入から国際連盟脱退を経て太平洋戦争へと突き進み、破局を迎えた。大国意識がこの悲劇の原因であった。

猪木正道は『軍国日本の興亡』（中公新書）で、日本人が日本の国力を過大評価し、隣国の人々の人権を踏みにじり、ついには世界全体を敵とする自爆戦争・自殺戦争に「よろめき込んで」行ったと言う（「突き進み」などという威勢の良いものではなかったと言う）。日本の悲劇の原因は、日本人が大国意識に驕り高ぶっていたことであるという。

日本の教科書問題で近隣諸国との関係がこじれている。日本が「歴史を歪曲している」と言われる。しかしそれが問題の核心ではない。「歴史歪曲」ということであれば、どこの国でもなされる。歴史は、特に「正史」は権力が書くものであって、独裁国家では常になされる。

昨日救国の英雄とされた者が今日は国賊となる。それは特に共産主義国家、独裁国家において著しい。

中国や韓国にも、どこの国にも他国の「歴史歪曲」をなじる資格はない。しかし「歴史歪曲」は言ってみれば建前なのであって、本音は別にあることを、日本は聞き取らなければならない。それは日本の大国意識である。日本は国連安保理事会の常任理事国の地位を狙っている。その根底にあるのが「大国意識」である。中国も韓国も日本の大国意識の被害を受けた。彼らは日本の肥大化した大国意識に苛立っている。

蝋山政道によると終戦の翌年に外務省が出した『特別調査委員会報告』に、今後の日本の役割は「大国の恣意と独善に対して…世界全体の繁栄と平和の立場から…弱小国の一員として、つねに勇敢な発言を試みることである」と書かれているという。蝋山はこれを引いて付け加える。「ああ、『弱小国の一員として』という言葉が発せられた当時の日本の国際的立場を想起するとき、今後の日本がどうなろうとも、その弱小さから生まれた謙虚さのあった事実を忘れ去らないかぎり、ふたたび戦前のごとき誤断を犯すことはないであろう」（『よみがえる日本』、中央公論社、一二六頁）。

日本は、否、外務省は何時から、安保理常任理事国になる夢を見るようになったのか。

日本は大国意識を持ってはならない。理想の国家は大国でなく、小国である。安保理常任理事国になろうなどと考えてはいけない。

今回のいざこざにしても、中国や韓国の大国意識が日本の大国意識と衝突しているだけである。そしてそれは中国や韓国の政権が国民の関心を対外問題に向けさせ、政権が抱える問題を隠蔽しようとしているだけである。

問題は腐敗した政治家・官僚である。日本も中国人や韓国人の乱暴狼藉に目を奪われて、日本の政治家・官僚の腐敗を見逃すようなことがあってはならない。それは日本の無能で腐敗した政治家や官僚の思う壺にはまることである。中国人や韓国人の行動に憤慨するよりも、日本の権力の無能腐敗を指弾すべきである。

大国主義は腐敗した官僚や政治家の隠れ蓑である。われわれの目標は、汚職や腐敗のない平和な文化国家を建設することである。

北欧諸国は腐敗や汚職のない平和な文化を確立していることで国際的に定評がある。国際的ＮＧＯ、Transparency International が毎年行っている調査によると、北欧諸国の腐敗度はほぼゼロである。民主国家がそこにある。長谷川保が感銘を受けたのはそこであった。

長谷川保は腐敗した官僚や政治家と闘い、剣や槍を鋤や鎌に打ち直し、福祉と平和の文化を築くため、福祉国家を築くために生涯を捧げた。

国連本部の前には剣や槍を鋤や鎌に打ち直す人々の像が立つ。ソ連邦（当時）が寄贈したブロンズである。